

5分でわかる 資料保存 vol.3

製本構造と破損・補修

図書館資料の保存に関して、考え方を解説するシリーズです。
今回は、製本構造、破損の態様、補修方法について簡単にまとめます。

製本構造

●製本の概要

普段手にする本は、本紙（中身）と表紙を別々に作り、最後に接着する「くるみ製本」が主流です。これは機械製本、大量生産に適した構造です。

以前は機械ではなく一冊一冊、本紙と表紙を手作業で綴じつけて仕上げる「綴じつけ製本」という方法で製本されていました。

●綴じ方の種類

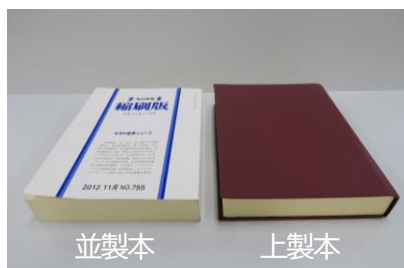
このように重なった折丁を、一つずつ糸でつないでいきます。

糸かがり綴じ：折丁^{おりちよう}同士を糸で縫い合わせます。丈夫で開きやすいのですがコストが高くなります。



無線綴じ・アジロ綴じ：接着剤で本紙の背を固める方法。開きやすく安価ですが、強度が本弱く紙が脱落しやすいです。

●表紙の形態と製本様式



上製本（ハードカバー）：表紙に板紙を使って堅牢に仕上げます。背の形状に、丸背（開きやすい）と角背があります。

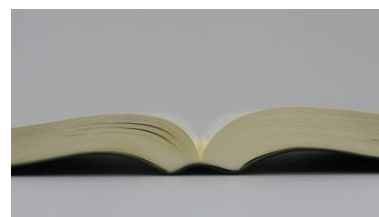
並製本（ソフトカバー）：表紙に厚紙を使用した簡素な構造です。接着剤で本紙と表紙を直接まとめる構造であり、低コストです。

製本の傾向として、「かがり綴じ＋上製本」から「無線綴じ＋並製本」が、現代の主流となってきています。

●背の構造



タイトバック：本紙と背が接着されており、開きにくいのですが堅牢です。



フレキシブルバック：表紙に柔らかい素材を使っているため背表紙が曲がります。



ホローバック：背表紙と背の間に空洞があり開きやすいのですが、のど部分に負担がかかります。

●その他の構成要素



溝：上製本的一种に見られる構造で、表紙と背表紙の間に隙間を作って開きやすさを向上させます。



見返し：本紙と表紙をつなぐ役割で、本紙の重さを支えます。

製本構造に起因する破損と補修方法

●綴じ部分の破損



糸かがり綴じの場合

・綴じ穴の破損

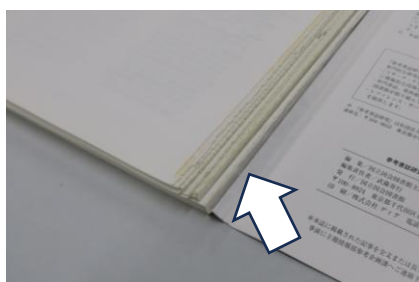
和紙で補修します。破損が大きい場合は糸で綴じ直します。

・糸切れ

綴じ糸が切れている場合は、再度糸で綴じ直します。

糸が緩んでいたり、折丁に隙間ができるのは構造上の特徴であり、糸が切れていなければ破損ではありません。和紙の帯で隙間を塞いで直します。

背固めという、背に接着剤を塗布する方法もありますが、本格的な補修のため手間がかかります。



無線綴じ・アジロ綴じの場合

接着剤の劣化で本紙が脱落することがあります。

軽度であれば、その部分だけ差し込んで補修、重度の場合は、媒体で綴じ直すこともあります。

なお、アジロ綴じは折丁単位、無線綴じは1枚単位で脱落します。

●上製本の破損

・背の破損

背の天(上)部の破れ・背表紙の外れが起こりやすいです。

破れた部分を和紙で補修するか、「背袋(クーター)」と呼ばれる紙製の筒を背に貼り付けて補修します。

タイトバックやフレキシブルバックでは、構造変更が必要な場合もあります。



・溝の破損

表紙の開閉の繰り返しで破れます。溝なし表紙は特に破損しやすいです。

軽度であれば和紙を貼って補修、重度の場合は、新しい表紙クロスや背袋を貼り付けて補修します。

●見返しの破損



重い資料や利用の多い本では、本の重さでのど部分が剥がれたり破れたりします。



剥がれた部分を竹串やへらを使って接着剤で貼り直すか、和紙の帯や背袋を貼って補修します。

補修の注意点

- ・補修の可否や程度は、資料の保存と利用のバランスを考慮して判断します。
- ・安易な補修は資料の価値や構造を損なうおそれがあります。
- ・必要に応じて、資料保存の専門家や業者と連携します。

まとめ

製本構造と、それぞれに特有の破損例を理解することで、図書館資料の扱い方や保存方法に配慮することができます。

参考文献 < >内は当館請求記号

○眞野節雄 著『図書館資料の保存と修理：その基本的な考え方と手法：眞野節雄講義録』日本図書館協会 2023.3, (JLA Booklet ; no.13).<UL755-M26>

○製本加工編集委員会 編・著『製本加工ハンドブック 技術概論編』日本印刷技術協会 2006.9<UE91-H3>

○東京製本倶楽部 編『製本用語集. 改訂新版, [製本版]』東京製本倶楽部 2024.6<UE2-R1>

解説 5分でわかる資料保存

vol.3

2025.12.2

国立国会図書館

収集書誌部 資料保存課